

田沢稲舟の作品群にみる古典詞

——『源氏物語』を中心に——

島内 景二

1 はじめに

田沢稲舟は、「たざわ・いなぶね」とも「たざわ・いなぶね」とも発音される。明治七年（一八七四）に、酒田県（現在の山形県）の鶴岡に生まれた。本名、錦。当初の戸籍名は「銀」だったが、八歳の時に、戸籍の「銀」の上に「錦」と張り紙して改名したという。通称、錦子。裕福な医師の家に生まれたので、後に「医学」をテーマとする小説を得意とした。

医師の娘だったが、文学と美術に才能を示した。独創的な文体を駆使した『夏木立』で文壇の寵児となった山田美妙（一八六八—一九一〇）に師事。美妙の指導を受けた小説で、デビュー。才子・才女の二人は結婚したが、夫の女性問題で苦悩することとなった。稲舟は、郷里に帰って、病没した。時に、明治二十九年（一八九六）。数え年で、二十三歳であった。自殺説も取り沙汰され、邦枝完二の伝記小説『毒薬の壺』（短編集『戀一筋』収録、新潮社、昭和三十一年）は、自殺説に基づいて執筆されている。

田沢稲舟は、樋口一葉（一八七二—一八九六）と比較されることが多い。ほぼ同じ頃に生まれ、同じ年に病没したからである。稲舟が山田美妙に師事したように、一葉は流行作家だった半井桃水（一八六〇—一九二六）に師事した。けれども、一葉と桃水が結ばれることはなかった。

男性小説家を中心だった明治の文壇で、女性が少しずつ頭角を現し始めた時期に、稲舟と一葉は相前後して登場した。そして、二人とも一瞬の光芒を放って、夭折した。現在、樋口一葉の名は「天才」として語り継がれているが、田沢稲舟の名は「鶴岡市民」と「山田美妙研究者」以外にはさほど知られていない。

近代の女性文学を切り開くに際して、田沢稲舟はどのような文体と方法論を採用したのか。それは、樋口一葉の文体と方法に比べて、遜色の無いものだったのか、それとも劣るものだったのか。本稿では、その点について突き詰めて考えてみたい。

なお、本稿は拙著『文豪の古典力』（文春新書、平成十四年八月）で提唱した分析手法の延長線上にある。すなわち、近代文学の底辺には、『源氏物語』などの古典文学の引力との激しい格闘があった、とする見方である。明治の文学者たちは『源氏物語』の原文に学び、それを模倣し、やがてそこから意識的に離脱していったと考えられる。古典と格闘しつつ、徐々に見出されたのが我が国の「近代小説」なのである。

田沢稲舟の残した作品については、鶴岡在住の細矢昌武氏が『田沢稲舟全集』（東北出版企画、昭和六十三年）、『田沢稲舟研究資料』（無明舎、平成十三年）という労作をまとめておられる。本稿は、この細矢氏の『田沢稲舟全集』収録の本文を分析した。「嗚呼」を「嗚呼」と何回も誤植したり、付加された註釈が不適切だったりするが、作品集という点で、これに優る書はない。

作品論に関しては、山形市在住の松坂俊夫氏の『田沢稲舟……作品の軌跡』（東北出版企画、平成八年）が、最も有益だった。また、ここに書名を記さないが、現在、古書店で入手可能な田沢稲舟関係の単行本にはすべて目を通した。

女性研究者の手になる「田沢稲舟」フェミニズムの先駆者」という観点からの論文は、かなりの数に上る。ただし、それらの論文も、細矢氏の注釈付きの全集も、松坂氏の作品論も、「本文それ自体の正しい解釈」がなお十分ではないかと思われる。明治の小説を論ずるためには、何よりも「伝統との角逐」を「古典からの引用」のレベルで実証的に論じなければならない。「新しさ」を論ずるのは、そのあとであろう。

現在では忘れかけられた田沢稲舟。彼女が論じられるのは、「フェミニズムの先駆者」という「人生」への興味からである。作品の粗筋は簡単に触れられても、「表現のレベル」についてはほとんど手付かずであった。

平成十三年、嵐山光三郎氏が小説『美妙、消えた。』（朝日新聞社）を刊行して、読書界で話題となった。当然、美妙の妻だった稲舟についても論及がある。ただし、彼女の作品の引用については、かなりの誤植が目立つ。それは、彼女への「人生」に対する多大な好奇心があっても、彼女が心血を注いだ野心的な「表現」を軽視した結果だと言われても仕方がないだろう。

本稿は、「表現者・田沢稲舟」の本質を探り当てようとするものである。以下、『全集』と呼ぶのは、細矢昌武氏の労作『田沢稲舟全集』のことである。特殊な平仮名や記号は、現行の通常の平仮名に変えて引用した。また、明らかな誤植と思われる箇所は、私意に訂正した。

2 散文『雪』

『雪』は、博文館から発行されていた『婦女雑誌』の創刊を記念した応募に当選したもの。明治二十四年三月号に掲載された。

夫の死去によって、妻と幼児が路頭に迷い、降りくる雪と空腹に苦しめられるという創作。一読して、源義朝の敗死によって、常盤御前が幼い牛若丸たちを抱いて雪の中を逃げ惑うというエピソードを連想してしまう。よくある（類型的）な場面設定である。『全集』で、二ページほどの小品。

末尾の文章を、引用しておく。

嗚呼思へば……あはれ昔は衣装を着飾りて雪見など、めでくつかへりし雪も、今は我身の仇……雪の朝、二の字二の字の下駄の跡……エー……何の雪の朝が、明日は此子が木の葉に似たる足跡。

『全集』には、細矢氏の註があり、「めでくつかへり」の箇所に関して、『賞で覆り』、見惚れながら歩いて転ぶこととある。けれども、この語釈では、不十分である。

例えば、森鷗外訳の『即興詩人』に、

世の常なる作をも、天才の為せるわざの如く、愛でくつかへるなるべし。

（「みたち」の章）

とある。「めでくつかへる」は、『源氏物語』竹河巻に、たつた一度だが用いられている古典詞（＝「源氏詞」）である。「くつかへる」は、転ぶの意味ではなく、程度がはなはだしいことを強調する接尾語。「ひどく愛でる」「たいそう褒める」という意味が正しい。

田沢稲舟は、『源氏物語』にも使われている特殊な古典語「めでくつかへる」を用いることで、「裕福だった昔は、奇麗な服を着飾って雪見などをして、風流に『きれいですこと』などと雪をひどく褒めていたこともあったのに、今ではその褒めたはずの雪に、こんなに苦しめられていることよ」と、作中女性の嘆きを訴えているのである。

なお、「雪の朝、二の字二の字の下駄の跡」は、『続近世畸人伝』収録の捨女（一六三三～一六九八）の発句の引用である。

田沢稲舟の中央文壇での最初の活字となった作品には、「めでくつかへる」という古典詞が象嵌されていて、それが全体の「字眼」となっている。それを、読み誤ってはならない。

3 新体詩『山吹』

明治二十五年六月の『婦女雑誌』に掲載された。田沢稲舟は、前年に『雪』を発表した直後から、山田美妙と会うようになった。美妙（＝美妙庵）も、新体詩を多数発表している（代表作は、「敵は幾万ありとても、すべて烏合の勢なるぞ」と始まる『敵は幾万』で、勇ましいメロデーも付いて愛唱された）。

さて、稲舟の『山吹』の歌詞を、最初から順に見てみよう。まず、第一聯。

口なしと 名にこそ立てれ 吾のみか いはぬはいふに いやまさる

山吹の花は、「梔子色」をしている。その「梔子（くちなし）」と、「口無し」との懸詞である。稲舟は、『古今和歌集』一〇二一・素性法師の、

山吹の花色衣ぬしやたれ問へど答へずくちなしにして

あたりの古歌を、念頭に置いている。さらに、「いはぬはいふに いやまさる」

の箇所は、『古今和歌六帖』の、

心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる

を引用していると考えられる。稲舟は、作中女性に託して、「山吹の花が梔子色をしているように、わたしは『口無し』で黙っています、古歌にもありますように、『好きだ好きだ』と口に出して大騒ぎするよりも、じつと黙って心の中で恋心を燃やす方が、本当の深い恋なのですよ」と、歌っている。

新体詩『山吹』の、つづきの第二聯。

こゝろの色を 八重一重 云ひいでがたき 井出の里

井出の里は、山吹の名所で歌枕。八重の山吹も、一重の山吹も、咲いている。この第二聯の修辭で注目されるのは、「云ひいでがたき」の「いで」が、「井出の里」の「井出」を導き出している箇所である。二音節の発音一致による「序詞」である。

『山吹』の第三聯から第五聯までは、連続して引用しておこう。

思へば恋し いそのかみ ふる春雨に ゆあみせし
妙になまめく わがすがた つれなく誰か 水かがみ
うつろふ世とは しりながら あせゆく色香 しらまゆみ

美しかった女性が、いつしかに褪せた我が姿を嘆くという状況。「いそのかみ」は「布留」という地名にかかる枕詞から転じて、「降る」の枕詞ともなった。第三聯の末尾の「ゆあみせし」が連体修飾句となつて、第四聯の「妙になまめくわがすがた」に連続してゆく。

第四聯の「誰か 水かがみ」は、「誰か (美しいと思つて) 見るだろうか」と、「水鏡 (水に映つた我が姿)」の懸詞。その第四聯の末尾の「水かがみ」が、第五聯の冒頭の「うつろふ」という動詞を導き出してくる。「鏡」は、顔が「映る」ものであり、その「映る」が同音の「移る」「移ろふ」という動詞の懸詞となつている。「しらまゆみ」は、「知らず」と「白真弓」の懸詞。

『山吹』の第六聯から最終聯までも、一氣に詠まれている。

ゆかりの月の かげ青く あぢきなき身を 秋の夜の
月毛の駒よ 水かひし 昔の人の かげだにも
なきたま川も かれゆけば うき身をかこち なく蛙 いはぬあはれを 人
やしる

「しらまゆみ」の「ゆかりの月」とは、弓の形をした三日月のことだろう。「秋の夜は」の「秋」は、「飽き」の懸詞で、男から飽きられ捨てられた女の「待つ苦惱」を表現している。『古今和歌集』以来の伝統的レトリックであり、主題である。

注目されるのは、第六聯と第七聯とで、『源氏物語』明石巻で、光源氏が詠んだ、

秋の夜の月毛の駒よわが恋ふる雲居をかけれ時の間も見む

を本歌取りしていることである。「秋の夜の月毛の駒」は、明瞭な源氏詞である。田沢稲舟は、『源氏物語』の読書体験があつたのである。

「水かひし 昔の人」とは、「昔、夕方になると颯爽と駒に乗ってわたしの家に訪ねてきてくれて、乗った来た馬に栄養として水や食料を与えた、あの恋しい男性」の意味。その男性の「かげだにも なき」(今では、影かたちも無い)訪ねてくれない」というふうには、第七聯と第八聯とが接続している。

「なきたま」と「たま川」も、懸詞なのだろうか。あるいは、恋人は「亡き魂」となつて、既に死んでしまったのかもしれない。「玉川」は、井出の里を流れる川で、山吹の名所。この玉川の里では、『古今和歌集』以来、山吹の花の下では蛙が鳴いていると歌われている。

その「玉川の豊富な水」が、夏になつて涸れてしまうと、水がなくては生きていけない弱い蛙が、「苦しい、苦しい」と鳴いて訴えている。でも、そのうるさいほどに鳴く蛙よりも、わたしのように、声には出さないで心の中で鳴咽しているわたしの方が、真実に苦しいのですよ。

ここで、稲舟の詩想は、

心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる

という冒頭の古歌を再び引用して、歌い収めている。

新体詩『山吹』は、恋の苦しみに耐える女のけなげさを、古歌をちりばめて綴ったものである。その中に、『源氏物語』明石巻の源氏詞が象嵌されている点に、特色があった。

4 新作浄瑠璃『西行郭問答』

明治二十八年一月の雑誌『文芸倶楽部』（博文館発行）に掲載された。これまでの作品は、すべて「田澤錦子」という本名で発表されており、この『西行郭問答』もそうなのだが、本文の中に、

いなにはあらぬ稲舟の恋路のすみをくむ気なら、こゝをあふ瀬と入らしやんせ、

という一節があり、翌月発行の『文芸倶楽部』に、初めて「いなぶね」という筆名が見られることの先蹤となっている。「いなにはあらぬ稲舟の」という言葉つづきは、『古今和歌集』一〇九二番の東歌、

最上川のばれば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり

を引用している。最上川は、田沢稲舟の郷里・鶴岡を流れている川である。『古今和歌集』の「稲舟」は、「いなぶね」と発音されるのが現在では通説だが、中世では「いなぶね」と発音する説もあった。田沢稲舟は、「いなぶね」を取ったのだらう。翌月発行の『文芸倶楽部』では、「いなぶね」と平仮名で署名している。さて、この『古今和歌集』の歌の大意を汲んでおこう。

「最上川を、稲を積んだ稲舟が上ったり下ったりしています。その『いなぶね』の『いな』という発音ではありませんが、わたしはあなたに対して『いな＝否（ノー）』という返事をしたいのではありません。でも、今月だけは『否』で、都合が悪いのですよ」。

男から求婚された女性が、「今月が終わるまでは待つて」という口実で、体よく結婚を拒否しているのであらう。「否にはあらず」と言っておきながら、心の中は「否」なのである。

『西行郭問答』では、西行を遊郭に導き入れようとして、遊女が、「西行さん。あなたも心の中では、色恋を『否（絶対にはしない）』とも思っていないのでしょ。まじめぶっていないで、早く登楼したらどうですか」と、からかっているのである。

「田沢稲舟」というペンネームには、郷里・鶴岡への思いが込められているのだろうが、それだけではない。小説家を志した田沢錦子が、なぜ「稲舟」と名乗ったのか、彼女の残した全作品を通して理解する必要があるらう。

『全集』を虚心に読んでいて痛感するのは、「結婚拒否」の「変わり者の女性」がヒロインである小説が多い（多すぎる）という点である。その点にこだわれば、「結婚拒否」への憧れが、彼女に「稲舟」という筆名を選び取らせたのではないかと推測されるのである。深読みすれば、『源氏物語』の空蟬・朝顔の斎院など、光源氏を拒否する一連のヒロインたちや、『堤中納言物語』の「虫めづる姫君」のヒロインなどとも、共通する性格設定である。「近代的自我の目覚め」による男性拒否なのか、古典文学のヒロイン造型の一類型としての結婚拒否なのか、稲舟文学の読者は冷静に見極めなければならない。

にも拘わらず、なぜ山田美妙に対してだけは、「否」ではなかったのか。そして、山田美妙との結婚生活に無惨に敗れた稲舟は、「否」を貰えなかった我が身をどう振り返ったのか。はなはだ興味をそえられる問題である。

なお、『西行郭問答』には、

こゝにくるわの女郎花、多き野辺ともしらずして、一夜むすばん草まくら

という一節がある。「女郎花」が「女郎＝遊女」を意味するのは、『古今和歌集』一二六・僧正遍昭の、

名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人に語るな

以来の伝統である。「女郎花、多き野辺」は、やはり『古今和歌集』二二九・小

野美材の、

女郎花多かる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ

の引用である。このあたり、古歌をちりばめつつ、稲舟は新作浄瑠璃の詞章を紡ぎ出している。

5 小説『医学修業』

明治二十八年七月号の『文芸倶楽部』に、「いなぶね女史」の名前で発表された。二十二歳にして、田沢稲舟は初めて本格的な小説を書いたのである。

「花江」という美しい娘が、継母にいじめ抜かれている。言わば、「継子いじめ」のストーリーである。継子いじめは、王朝の『落窪物語』や中世の『鉢かづき』など、我が国の古典文学で愛好された毎度お馴染みの文学趣向である。中でも、『鉢かづき』とはほぼ同じ趣向の継子いじめのお伽草子に『花世の姫』があることを連想すべきだろう。「花子」という継子・養女の物語もある。『医学修業』のヒロインの名前の「花江」とは、花のように美しい女性という意味だけでなく、「継子譚」にしばしば用いられるネーミングなのだろう。

花江は、継母の藤子に引き取られ、陰湿にいじめられている。藤子の実の娘の春江も、醜女で性格も悪い。たった一人の味方であるはずの父・薫は、ある日突然に、「花江に医学修業させたい」と言い出し、彼女を有名な女医に弟子入りさせる。薫を裏で操っているのは、継母であり、体よく家から追い出したのだ。継母は、学資も出さなかったで、花江は住み込んだ女医の家でも、意地悪な先輩たちからいじめられる。

ここで、父が花江を「女医にしたい」と思いつく場面が、いかにも唐突である。おそらく、「継母の讒言を信じて、実の娘を家から追い出す愚かな父親」という継子譚の典型的ストーリーの「変型」にしか過ぎないのだろう。この小説は、医者の家に生まれた田沢稲舟の「自叙伝」のようなものであり、母親への複雑な感情の反映だと解する見方がある。むろん、そういう側面もあるだろう。けれども、実人生だけではなく、そういう普遍的な文学類型が古代からつづいており、それに稲舟の人間観や家庭観がまるごと乗っかかっているのである。

というわけで、花江が住み込んで修業することになった家の女主人・吉岡生子は、継子譚における「山姥」に該当しよう。ただし、田沢稲舟は古典的継子譚のストーリーを大きく変更し、山姥の家で鍛えられた継子の姫君が幸福を得る（具体的には理想的な結婚相手に恵まれる）という結末を、完全に無視している。花江には、幸福な結婚が与えられなかった。

『医学修業』の中で、ヒロイン花江は、安藤為章の『紫女七論』を読み、「紫式部の才能」を羨んでいる。『紫女七論』は、『源氏物語』の作者である紫式部の人となり論じた評論である。彼女は、女医ではなく、紫式部のような物語の作者になりたかったのだ。

吉岡の家のあちこちが修繕せねばならぬほど傷んでいることを述べる箇所では、「かの田舎源氏の光氏が、たそがれをいざなひたる古寺のふすまにいとよく似かよひて」とあるのは、『源氏物語』をパロディに仕立てた柳亭種彦『修紫田舎源氏』からの引用である。具体的には、『源氏物語』夕顔巻のパロディである。

明治時代の女性たちは、『源氏物語』の原文以前に、それよりも読みやすい『修紫田舎源氏』を愛読していたらしい。森鷗外の母や妹も、『修紫田舎源氏』を愛読していた、その後で『源氏物語』の原文に進んでいったという回想を残している。田沢稲舟の『源氏物語』体験は、あるいは『修紫田舎源氏』経由だった可能性もある。

それでは、稲舟の『源氏物語』体験は、小説『医学修業』のどこに最も顕著に反映しているのだろうか。細かな言葉づかいは省略して、大きな作品の骨格について考えよう。

まず、花江の実の母が本妻の迫害に耐えかねて、出奔して行方不明になる場面の叙述に、

雨風さわがしき夜にまぎれてゆくへしれず。

とある。次に、花江が吉岡から破門されて継母の家に戻されて、いじめに耐えかねて出奔する場面にも、

からくしてふるふる足をふみしめながら、窓よりひそかにのがれいで、

とある。これらの場面設定（あるいはストーリー展開）は、『源氏物語』宇治十帖で、人間関係の泥沼に陥った浮舟が、大雨の日に突然に出走して行方不明になる場面に、影響を受けたのではないだろうか。「花江＝浮舟」という見立てである。これから、稲舟は「浮舟」タイプの女性の登場する小説を次々に量産することになる。

『源氏物語』の浮舟は、死ななかった。尼に姿を変えて、小野の山里で暮らしていた。その生存は、彼女を出家させた横川の僧都の口から、宮中で栄華を誇る明石中宮の耳に入る。『医学修業』の花江は、娘義太夫に変身して、生きつづける。その事実は、女医・吉岡の目によって確認される。「吉岡＝明石中宮」という見立てである。

継子いじめの物語のストーリーを利用して構想された稲舟の『医学修業』は、『源氏物語』の浮舟の物語とのオーバーラップによって完成したのである。それは、浮舟の人生が継子いじめの大衆的（土俗的）物語の類型のうえに成立しているという稲舟の洞察によって、可能となったのだろう。

最後に、あと一つ、『源氏物語』の影響の痕跡を指摘しておく。継母のことを、「その原ならぬは、き木」と述べるくだりがある。ここは、『源氏物語』帚木巻の構想に大きく作用した、『古今和歌六帖』の古歌、

その原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな

を踏まえている。「園原」という信濃国の地名と、「その腹ならぬ」（そのお腹から生まれたわけではない）との懸詞である。「ははき木」も、「帚木」（帚のような形をした木）と、「母」との懸詞。『古今和歌六帖』の古歌に見える「伏屋」（粗末な家）という言葉も、しばしば継子譚で用いられるものである。

まとめてみよう。稲舟の初めての本格小説『医学修業』は、継子譚のストーリーを採用し、『源氏物語』の浮舟物語の影響を受けたものだった。ただし、単純な影響ではなくて、浮舟の出家を、花江の娘義太夫への変貌に置き換えたところに、稲舟の工夫が見られる。

ただし、浮舟は薫（ちなみに、花江の実父の名前が「薫」だった）と匂宮との三角関係に敗れて、出走した。ところが、花江は「男ざらひ」であり、継母のいじめに耐えかねて出走した。同じようなストーリーだが、明らかに花江の変貌の方に、リアリティと必然性がない。「結婚拒否」や「男性拒否」というヒロイン

設定が、「恋愛に挫折して女の死と再生」という『源氏物語』の世界との一致を不可能にさせた。

『医学修業』は、浮舟の物語のいささか安手のパロディで終わってしまったている。あたかも、柳亭種彦の『修紫田舎源氏』が、『源氏物語』の平板なパロディで終わってしまったかのように。「人間」が描けているかどうか、そこが本物とパロディとの分かれ目である。

6 新体詩『つまべに』と散文詩『月の別』

この二つの詩は、明治二十八年九月の『文芸倶楽部』に同時発表された。『つまべに』の署名は、「いなぶね」。『月の別』は、「きん子」。

まず、『つまべに』。結核にかかって死に瀕している女性の立場で、詠まれた詩である。結核で血を吐いて、指で払ったら、あたかも「つまべに」のように爪が赤く染まった、という壮絶な内容。「鳴いて血を吐くほととぎす」という諺もあるので、『つまべに』は「ほととぎす」という鳥を中心に据えて詩想が展開している。その後半部分を、引用しておく。

知るやしらずや 五月雨の 雲間すぎゆく ほととぎす
死出の田長と きけばなほ いき死に知れぬ は、きんの
そのおもかげの 忍ばれて とともに音をなく 今宵かな

『全集』の註は、『古今和歌集』の「いくばくの田をつくればほととぎす死出の田長を朝な朝なよぶ」の引用を指摘している。確かに、ほととぎすを「死出の田長」と呼ぶのは、この歌に由来しているの、この註が誤りだと言うことはできない。けれども、いささか本質から逸れていると思われる。

まず、何よりも、「は、きんの その」という言葉つづきの中に、田沢稲舟が『医学修業』の中でも引用していた古歌、「その原や伏屋に生ふる帚木のありとは見えてあはぬ君かな」の影響を感じ取るべきだろう。小説の『医学修業』と新体詩『つまべに』の根は、つながっている。どちらも、継母を嫌い、実の母親を慕う不幸な娘、という設定である。

「その原や」の古歌は、『源氏物語』帚木巻に影響を与えたものだった。稲舟

の「つまへに」は、『源氏物語』の世界とつながっている。

「五月雨の 雲間すぎゆく ほととぎす」の部分に、『源氏物語』の雰囲気濃厚に立ち込めている。まず、花散里巻。光源氏は、「五月雨の空めづらしく晴れたる雲間」に、花散里を訪れ、「ほととぎす」の声を聞きながら、亡き父・桐壺院を追懐する。さらには、幻巻。光源氏は、「五月雨」の「雲間」に、ほととぎすの声を聞きながら、亡き妻・紫の上を追懐する。

むろん、「五月雨の 雲間すぎゆく ほととぎす」という類型的な表現は、『源氏物語』の引用というよりも、初夏の風物詩の定型なのではある。ただし、その「季節表現の類型」が、ほかならぬ『源氏物語』を美意識の集積池として流れ出したものだということを、忘れてはならぬと思うのである。

散文詩『月の別』は、日清戦争に出陣する軍艦を歌ったもの。

いささか脇道にそれるが、明治天皇の后だった昭憲皇太后の歌集をかつて通読していて、気づいたことがある。それは、「船」を歌った作品が、実にたくさんあったことである。日清・日露の両戦争は、近代日本の国運を賭けた戦さだったが、その勝利を担うと期待されていたのが「軍艦」である。昭憲皇太后の短歌（和歌）に、「船」が頻出する事実には必然性があつたということである。稲舟の『月の別』も、「軍艦」を歌った韻文作品の系列に位置づけられる。軍艦の出港に際して、月は雲に隠れていたが、やがて顔を見せた。月は「影きよく」照りわたり、「千里の外もあきらけし」という明るさだった。

この「千里の外」という表現は、具体的には『徒然草』第一三七段の、

望月のくまなきを、千里の外まで眺めたるよりも、

を引用しているのだろうか、『白氏文集』の、

三五夜中新月ノ色、二千里ノ外故人ノ心

や、この『白氏文集』を踏まえた『源氏物語』須磨巻のエピソードなどまで、古典文学に通曉した読者には連想されることだろう。

そう考えれば、『月の別』の末尾で、軍艦が勇ましく台湾島に向けて進み行くシーンも、明石巻で光源氏の乗った舟が飛ぶように海上を進んで、須磨から明石

へと「浦伝ひ」したことを無関係ではないだろう。

田沢稲舟の「舟」と「月」に関する構想力は、古典文学の類型からさほど逸脱しているものではない。

7 浄瑠璃『鏡花水月美人禅』

明治二十八年十一月の『文芸倶楽部』に発表された。

結婚拒否を固く心に秘めて、鎌倉將軍・源頼家の求婚を拒んだ畠山重忠の娘・玉琴姫の潔癖な人生を賛美した作品。

娘の世俗的幸福を願う父親の「子ゆゑの闇」が、冒頭に提示されている。『源氏物語』で何度も引用されている『後撰和歌集』一一〇三・藤原兼輔の歌、

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

に基づく慣用句である。

玉琴姫は、自分の世俗的な栄華を捨てることで、あえて両親眷属の後世を救おうと決心している。その決意を語る箇所、

人皆をしむ少年の、春をもよそにすてしなり。

とある。ここは、『源氏物語』と並び称された王朝物語の傑作『狭衣物語』の冒頭の名文句、

少年の春惜しめども留まらぬものなりければ、

を踏まえていよう。あるいは、『狭衣物語』が引用している『白氏文集』の、

燭ヲ背ケテハ共ニ憐レム深夜ノ月

花ヲ踏ンデハ同ジク惜シム少年ノ春

を、意識していよう。『源氏物語』と同じく、『狭衣物語』の美文・美文は後世に頻繁に引用されるのだが、そもその物語自体が和漢の美文・美文からの引用の織物だったのである。

『源氏物語』などの古典文学を読むことで、そこに引用されている膨大な名文を、読者は「詩囊」に収めることができる。田沢稲舟の文学修業も、そのようなものだったのだろう。

8 小説『しろばら』

明治二十八年十二月の『文芸倶楽部』に発表された。この号は、『臨時増刊・閨秀小説』と銘打たれ、樋口一葉が名作『十三夜』と『やみ夜』を発表している。稲舟の『しろばら』も、彼女の作品の中では屈指の力作であり、これまでにない長編である。ただし、一葉の『十三夜』が文学史に名作として輝いているのに対して、稲舟の『しろばら』は知る人ぞ知るといふマイナーな評価に留まっている。何が稲舟には欠けていたのか。そして、何が稲舟には過剰であったのか。

この小説の発表直後に、稲舟は師の山田美妙と婚姻した。幸福の絶頂にある稲舟にしては、意外なほどに不幸なストーリーの小説である。稲舟の無意識は、美妙との結婚生活の不幸を、あらかじめ透視していたのだろうか。

ヒロインの名前は、桂光子。例によって、「男性拒否」と「結婚拒否」の観念に取り憑かれた美女である。彼女は、その美しさのために多くの男性から恋慕され、同性の嫉妬の対象となるが、「男嫌い」の「変り者」としての生き方を貫こうとする。作者は、必ずしもヒロインを美化してはいない。

華族の馬鹿息子である星見篤磨は、どうしても従妹の関係にある光子と結ばれたい。結婚を申し込むが、光子の拒否の念は強い。このあたり、『源氏物語』の玉鬘巻を連想させるものがある。筑紫の地で、権勢を笠に着た大夫の監に求婚された玉鬘が、必死に断りつづけ、やっとの思いで逃亡する姿が語られる場面である。玉鬘の頼りは「乳母」だったが、『しろばら』にも光子の乳母が登場している。

しかし、篤磨が光子邸に女中として潜入させておいた「お勝」の手引きで、二人は肉体関係を持つてしまう。男が、寝ている女の口にクロロホルムを嗅がせ、意識を喪失している光子の操を、強引に奪ったのだ。この構想力は、玉鬘に求婚

した男性たちの中で最も分が悪い鬚黒大将が、味方に付けた女房の手引きで玉鬘の寝所に侵入して強引に我が物にした箇所は換骨奪胎であろう。

すなわち、『源氏物語』の玉鬘十帖と共通する文学世界が『しろばら』にはあり、「光子」「玉鬘」という見立ては一貫しているが、「星見篤磨」「大夫の監」（醜男の美女への求婚の失敗）と「星見篤磨」「鬚黒大将」（醜男の美女への求婚の成功）とが立体化しているのだ。そう考えれば、『しろばら』冒頭で、篤磨が光子との結婚の邪魔になる愛人に別れ話を持ちかけて、愛人が逆上するという場面設定は、鬚黒大将の北の方が玉鬘に嫉妬して、滑稽なヒステリー症状を起こす場面からヒントを得た可能性がある。

ただし、作品の結末が『源氏物語』と『しろばら』とは全く異なる。玉鬘は、鬚黒大将との結婚生活を受け入れる。光子は、投身自殺して自らの生命を絶つ。『しろばら』には、まったく救いがない。この後味の悪さは、夫となる山田美妙の代表作『いちご姫』が、貴族女性の転落、近親相姦、発狂、裸体で転がる美女の死体の腹部を舐め回す犬、などを悪趣味に描いているのと、好一对である。美妙と稲舟は、実によく似た「変り者の夫婦」であった。

『しろばら』は、近代的自我に目覚めた光子の悲劇を描いたと読まれがちではあるが、この小説の基本的骨格は『源氏物語』の古典的ストーリーからそれほど遠くへは出ていないと認定できる。

具体的な表現に注目しつつ、『しろばら』の内容を辿ってみよう。

光子は、「岸本英和学校」に通学しているが、校長から好意を示されたり、篤磨の愛人から脅迫を受けたりしたので、自ら退学することを決意した。光子の美貌と才能に嫉妬する同級生たちの醜態が、戯画的に描かれる場面がある。

季節は「秋の末つ方」で、「艶に床しき」ありさまなのに、彼女たちは口汚く「さへづり」ちらしている。「さへづる」という動詞は、『源氏物語』などで「ものあはれ」を理解しない山賤や海人たちの会話を指す特徴的な言葉だった。稲舟は、「さへづる」という言葉を「うるさくしゃべり散らす」というだけの意味ではなく、「未熟な心の持ち主にふさわしい軽薄な発言をする」の意味で使用している。それが、『源氏物語』の用法と一致するのである。

男嫌いの光子は、奇行のエピソードの持ち主でもあった。男の視線を気にしないので、ある時は「美しい顔に、墨をべつたりつけて」教室に入ってきたこともあったという。ここは、『源氏物語』末摘花巻で、光源氏が自分の美しい鼻に

「紅」を付けて紫の上と戯れる場面からヒントを得た可能性もあろう。縁談の舞い込む光子は、同級生たちから「大ぬさの何とかさ」と、羨まれる。ここは、『伊勢物語』第四十七段の、

大幣の引く手あまたになりぬれば思へどこそ頼まざりけれ

を引用している。同じ歌が『古今和歌集』にも入っており、『全集』の註は『古今和歌集』からの引用とするが、田沢稲舟の他の作品で『伊勢物語』の影響が顕著であることを考えると、直接の典拠は『伊勢物語』とすべきだろう。光子が「引く手あまた」で、多くの男性から好意を持たれていることを、全く異性から顧みられない同級生たちが嫉妬している場面である。

一方、光子から無視されている篤磨は、苦しい恋に苦悶する。華族の跡取り息子で、気楽な身の上なのに、従妹の光子の心が自由にできない。その気持ちには「ろくでなしの恋といふ奴、思へばよほどのくせものなりけり」と、「恋」を擬人化して表現されている。ここは、『万葉集』の、

ますらをの聡き心も今はなし恋の奴に我は死ぬべし(二九〇七番)
家にある櫃にかぎさし納めてし恋の奴がつかみかかて(三八一六番)

などの「恋の奴」という万葉語を、稲舟は意識したのではあるまいか。これに続いて、篤磨が、「又しても物を思はするか」と思う箇所は、『百人一首』で有名な、西行の、

嘆けとて月やはものを思はするかこち顔なるわが涙かな

の引用である。この西行の歌は、稲舟がよほど気に入っていたものと見え、これから何度も引用されることになる。

従兄の篤磨の執拗な求婚にいらだつ光子は、気晴らしに大好きな読書に集中しようとする。手に取ったのは、『狭衣物語』。稲舟が、浄瑠璃『鏡花水月美人禪』でこの『狭衣物語』の冒頭文を引用している事実は、既に指摘済みである。稲舟

には、『狭衣物語』の読書体験があったと思われる。

『狭衣物語』は、狭衣大将が従妹に当たる源氏宮にいつ果てるとも知れぬ恋心を持つ、というストーリーである。だからこそ、『しろばら』では、

御機嫌の大毒物、狭衣大将が其いとこの源氏の宮を恋慕ふ所なれば、光子はまたもむつとして、肝癪ななかおさへ切れず、怒りの余り罪もなき本取りあげて、あらあらしく前なる池に投げ捨れば、……

と、展開してゆくのである。ここでは、「狭衣大将」「篤磨」、「源氏宮」「光子」という見立てである。稲舟は、光子が「従兄」の篤磨から愛されるという人間関係を、『狭衣物語』から学んだ可能性がある。

ところが、光子の父は、篤磨が「伯爵家の跡取り」であり、彼と結婚すれば娘が「伯爵夫人」となるという名誉に目がくらんで、二人の結婚を承知してしまう。傷ついた光子は、親不孝を詫びながら家出を決意する。その場面で、

此身は今より浪の荒い浮世の海に船出をして、目当の岸に行かふとは思ふもの、どんな気まぐれな暴風に吹飛ばされるか、ひつくりかへされてあとかたもなくなるか、それを思へば何となく、名残おしいと心のうち、思ひみだれてたゆたひしが、……

という逡巡が語られている。ここは、『狭衣物語』からの連想で言えば、飛鳥井の女君が失踪する箇所と関連するのだが、稲舟の古典力は、ここで『源氏物語』浮舟巻の世界を直接のモデルとして設定することになった。

浮舟が勾宮と共に、「小さき舟」に乗って宇治川を渡る場面に、

さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、……

橘の小島の色は変はらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

とある。そして、浮舟が失踪する直前には、未来への不安と、母親の期待を裏切ることになった申し訳なさだが、語られる。『しろばら』における光子の家出は、

『源氏物語』の浮舟の物語に想を得ていると考えられる。「光子」浮舟」という見立てである。

ところが、浮舟が「乳母」の家に逃避することから、同じ『源氏物語』の中でも玉鬘が乳母と一緒に大夫の監という無骨な求婚者から逃げ出すという場面の「引用」換骨奪胎」も試みられることになる。すなわち、「光子」玉鬘」という見立てである。

稲舟は、相当深く『源氏物語』を読み込んでいて、あちこちの名場面を重ね合わせ、パッチワークのように繋ぎ併せて、自らの「近代小説」を紡いでゆく。これは、稲舟だけの創作手法ではなく、漱石・鷗外・紅葉・一葉などの創作手法でもあった（拙著『文豪の古典力』参照）。問題は、漱石・鷗外・紅葉・一葉たちが、このような「源氏物語写し」「源氏物語崩し」の近代小説を不可とし、しだいに「源氏物語との別れ」の姿勢を鮮明にしていたという事実である。田沢稲舟は、どこまで『源氏物語』に学び、どこから『源氏物語』と袂を分かったのか。あるいは、遂に自らの「近代」を発見できずに終わってしまったのか。そこを、客観的に見定めねばならない。

両親の家から逃げ出して、とぼとぼ歩く光子は、ヨーロッパに留学中の兄を思いう出す。兄さえいてくれればこんなことにはならなかったのに、という思いに捕われたのだ。この箇所は、

此美しい月影を、遠い千里の外で見て、今頃はまア何を考へて入ツしやるだらう。

とある。「月の光」を「千里の外」で眺めるというのは、散文詩『月の別』の分析で既に指摘したように、『白氏文集』の漢詩と、『源氏物語』須磨巻とを融合させて引用しているのである。この場面から、「光子」光源氏」という貴種流離譚のストーリーが浮上することになる。

突然、光子に家出された両親は驚愕して、とにかく居場所を突き止めようとす。この場面は、

自分の居間に引込て、立ったり居たりうろうろと、帰りをまつ夜は更けて、

……

とあるのは、もしかしたら『伊勢物語』第二十一段あたりの投影があるのかもしれない。ある日突然に妻が家出する。残された男は、

何によりてか、かからむと、いといたう泣きて、いづかたに求めゆかむと、門にいでて、と見かう見、見けれど、いづこをはかりともおぼえざりければ、……

とある。あるいは、『伊勢物語』第四段には、突然に愛する女性を失った男のようすが、

立ちて見、ゐて見、見れど、

と語られている。「家出した愛する者の帰りを茫然として待つ」という常套的な文学類型ではあるが、その起源は『伊勢物語』にあると思われるのである。

乳母の家に避難した光子だったが、篤磨の手先となった女中の「お勝」の陰謀で、二人は光子の祖母の住む越後を日指することになる。この場面は、光子の旅立ちが「配所」にもむくけしきは見えぬ、いかにも楽しそうだった、と叙述されている。

「配所」という言葉は、『徒然草』第五段でも紹介されている、源顕基中納言の名言「罪なくして配所の月を見ばや」からの連想もあるかもしれないが、直接には『源氏物語』須磨巻である。すなわち、「光子」光源氏」、「須磨・明石」越後」という見立てである。

光源氏は、「配所」である須磨と明石の地で生まれ変わって、帰京できた。光子は、お勝の手引きで「配所」の部屋に侵入した篤磨に肉関係係を結ばされ、絶望の余り越後の荒涼とした海に身を投げて死ぬ。『源氏物語』の貴種流離譚の結末を反転させて、稲舟は「しろばら」のストーリーを完結させる。

越後へ向かう汽車の中で、光子は「浅間のけむりの見えぬを怨」んだ、という。ここは、『伊勢物語』第八段の、

信濃なる浅間の嶽に立つ煙をちこち人の見やはとがめぬ

を下敷きにしている。旅する王朝人と言え、光源氏と在原業平。光源氏は西の須磨へ行き、業平は東下りをした。そして、光子は「北」へ向かう。

直江津の旅館で、光子は母親に当てた手紙を書いて、心情を吐露する。その手紙に、彼女は、

秋のよのくまなき月の影としもすま、ほしきは心なりけり

という歌を書き入れた。「秋の月の光のように、自分の心も澄みきったものになりたいものだ」という意味である。この歌の「すま、ほしきは心なりけり」という構文は、『源氏物語』桐壺巻の最初の歌である、

限りとして別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

と酷似する。光子は、まだまだ自分の命を生きたかった。にも拘らず、桐壺巻の歌を詠んだ桐壺更衣に余生が残されていなかったように、『しろばら』の光子も短い命を了えることになる。ここでは、「光子桐壺更衣」（美人薄命）という見立てである。

直江津の海辺の旅館に宿る光子の耳には、波の音が聞こえてくる。

今まで遠き浪の音も、次第次第に近づきて、たゞこゝもとによるかと思はれ、いともの悲しく聞ゆるにぞ、いにしへ光君のさすらひけん、須磨のねざめも思ひやられて、流石の光子も心細く、そゞろにあはれを催して、古さと恋しくなつかしく、行末こし方など思ひやれば、……

『全集』の註が指摘しているように、ここには『源氏物語』須磨巻の明白な引用がある。古来、名文として名高い箇所である。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言

の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれるものはかかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただこもにと立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりけり。

そして、最後のクライマックス。お勝は、感傷にひたる光子の油断をみすかして、光子をこっそり尾行してきた篤磨を、彼女の寝所に導き入れる。これは、『源氏物語』などの王朝物語の常套であって、「女房が男の手引きをして、お姫様を裏切る」というパターンである。鬚黒大將が女房の手引きで玉鬘と契った箇所が、その典型である。また、光源氏（篤磨）が王命婦（お勝）の手引きで、藤壺（光子）と関係を結んだ、という場面も連想される。とするならば、「玉鬘光子」あるいは「藤壺光子」という見立てである。

一体、何人の『源氏物語』のヒロインが、たった一人の光子の人物造型に貢献させられたことか。問題は、複数のモデルによって「光子の人間像」が分裂し拡散してしまったか、それとも多面的で複雑な女心を持つ「生身の女性」としてのリアリティを獲得しえたか、という点にある。

篤磨を導き入れたお勝は、「仕すましたり」と叫んだ。「やった」あるいは「うまいこと、やりおせた」という意味である。『源氏物語』の女房ならば、「しすしつ」と快哉を叫ぶところである。

篤磨は、光子が起きないように、彼女の口に「クロロホルム」という麻酔薬を嗅がせた。ここが、医者（の娘）に生まれ、医者になることを嫌って文学修業に打ち込んだ田沢稲舟の面目躍如たるところである。

確かに、「クロロホルム」を小説に導入したのは田沢稲舟が日本で最初だったかもしれないが、発想としてはそれほど斬新なものではない。『落窪物語』に、典薬頭という老人が出てきて、若い落窪の君の寝所に侵入して、房事に及ぼうとする場面がある。その侵入は失敗したのだが、「典薬頭」という彼の地位が、「薬物を利用して女性に迫る」という古い発想の存在を証明している。これを一歩先に進めれば、天狗の隠れ蓑を着て姿を見えなくして、姫君の寝所に侵入するという説話の発想になる。

けれども、この「クロロホルム」という素材の、何と後味の悪いことか。この

「後味の悪さ」は、以前にも述べたことがあるが、夫の山田美妙譲りである。ちなみに、『しろばら』には「劣情」という言葉が見られるが、山田美妙の『いちご姫』にも「劣情」という言葉が何回も使われている。「劣情」から目をそらさずに、しっかりと描くのが、美妙と稲舟なのである。ただし、自然主義文学の「劣情の告白」とは、まったく異なっている。あくまで、日本の古典文学の類型としての「劣情」なのだ。

篤磨が光子を自分のものにした数日後、光子の死骸が柏崎の海岸に漂着しているのが発見された。これも、美妙の『いちご姫』の結末（美女の裸体の死骸の腹部を犬が舐め回す）と共通する「後味の悪さ」を漂わせている。

「髪はさながらつくもの如く、あはれに乱れし少女の死屍」とあるのは、『伊勢物語』六十三段の「もとせにひととせ足らぬつくも髪」の歌の引用だろう。ところが、『しろばら』の創作に当たって、王朝物語の影響が大きかったという点を考慮すれば、二つほど稲舟がヒントとした箇所が思いつく。

まず、『源氏物語』の浮舟。浮舟は、宇治川への入水自殺を図った。ただし、その死骸は、浮かばなかった。なぜなら、彼女は生存して新しく生き直していたからである。

次に、『狭衣物語』の飛鳥井の女君。飛鳥井君は、瀬戸内海の虫明の瀬戸で、舟から飛び降りて投身自殺を図った。乳母に裏切られて、嫌いな男に体を奪われかかったからである。「海」という点や、「乳母や女房の裏切り」という点を考慮すれば、『しろばら』は『源氏物語』よりも『狭衣物語』の方に似ていることになる。ただし、飛鳥井の女君も、浮舟と同じく、死なずに生きていた。

田沢稲舟は、「話を終わらせる」ことに力点を置いて、『源氏物語』や『狭衣物語』の手法には従わなかった。それは、彼女の本質が「短編作家」だったことを如実に物語っている。「死んでいるようで、生きている」というのは、長編小説の手法だからである。

『しろばら』は、稲舟の残した作品の中では屈指の「長編」ではあるが、骨組みは短編仕立てだったのである。暴力で男と結ばれた光子が、どんな後半生を生きるか、執拗に凝視するだけの「根気」が、稲舟には欠けていた。「劣情」への過剰なまでの関心と、まさに裏腹である。光子を自殺させずに生きさせれば、『長編小説』を書くことで作者の人生観と文学観が激変するというドラマが起り得たことだろう。その時、田沢稲舟は、一流文学者の仲間入りができてかもしれ

れないのに、と惜しまれてならない。

9 散文詩『片恋』など

『しろばら』と同じ『文芸倶楽部』明治二十八年十二月号に、「花鶴姫」の筆名で、九編の詩が発表された。

『片恋』は、またしても「こひに心をみださじと、かみにちかひし身」という、結婚拒否・男性拒否の女性のことが歌われている。

『雲のかり』では、空を飛ぶ雁に託して、苦しい恋心が歌われている。『源氏物語』の少女巻で、夕霧が引き裂かれて逢えない雲居雁をしのんで「雲居雁もわがごとや」と口ずさむ場面などを、かすめているよう。

10 小説『峰の残月』

明治二十九年二月の『文芸倶楽部』に、「稲舟女史、美妙斎主人・合作」として発表された。前年の十二月に二人は結婚し、この二十九年一月一日には、稲舟は美妙の結婚が『読売新聞』などで報じられていた。

対立し合う二つの家がある。一方の家の娘が、他方の息子に惚れてしまう。その事実を打ち明けられずに、娘は恋の病で今にも死にそうになり、医者も匙を投げる。けれども、真実を知った母親の説得で、父親も積年の恨みを捨てて、他方に婚姻を申し込む。

このストーリーの中に、「本家」と「分家」の確執が組み込まれ、義理と人情の板挟みになった人々の苦しみ語られる。

古典文学の影響は、少ない。あるいは、この小説は「合作」と言いつつ、山田美妙の筆が多いのかもしれない。稲舟ならば、もっと多量の古典摂取が指摘できるはずだからである。

純情な娘が、恋を親に打ち明けられずに重体に陥って、「命さへ旦夕に迫」ったという設定。ここは、『伊勢物語』第四十五段の人間関係を利用しているのだろう。

昔、男ありけり。人の娘のかしづく、いかでこの男にもの言はむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病みになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」と言ひけるを、親、聞きつけて、泣く泣くつげたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、……

『伊勢物語』の娘は、死んだ。『峰の残月』の娘は、好きな男と結婚できそうな期待が出て来たので、元気になった。ところが、『峰の残月』が『伊勢物語』を引用しつつも、変更して工夫した箇所である。なお、後述するが、田沢稲舟の残した『雑記帳』からは、彼女の『浜松中納言物語』への深い関心がうかがわれ、そこに「男への恋心で病に伏した娘が、病になって、親に告白する」という場面があるので、『伊勢物語』ではなくて『浜松中納言物語』の影響なのかもしれない。ただし、『伊勢物語』四十五段を稲舟が読んでいないことはありえないので、両方の読書体験が錯綜しているのであろう。

この箇所以外は、「古典との関連」という点で、見るべき箇所は少ない。

『峰の残月』の発表直後、早くも稲舟は美妙と不仲になる。夫の愛人発覚が契機である。三月、傷心の稲舟は鶴岡に帰郷する。

11 詩『心のやみをばてらすずて物おもはする月にうたふさんげのひとふし』

美妙と別離した稲舟が、明治二十九年六月八日の『読売新聞』に発表した長詩である。『懺悔物語』と改題されて、同年七月刊行の『文芸倶楽部』にも再録された。散文詩ではあるが、七五調のリズムを守っており、長編の新体詩と言ってもよい。張り詰めた緊張感が漂っており、よほど切迫した思いが稲舟にあったことを推測させる。『詩』の領域における稲舟の代表作（最高作）である。

『心のやみをばてらすずて物おもはする月にうたふさんげのひとふし』というタイトルの意味は、ややわかりにくい。月にうたふさんげのひとふし」が基本となる言葉で、「心のやみをばてらすずて」が「月」に係る連体修飾句である。「ちっともわたしの心の闇を照らして明るくしてはくれないで、ただわけもなく悲しい思いをさせるだけの月。その月に向かって、わたしが切々と歌う懺悔の一

節」というくらいの意味になる。稲舟の溢れる心情が、異様なまでに長い連体修飾句となって、文脈を複雑にし、かつ振じ曲げている。「心のやみをばてらすずて」は、おそらく『拾遺和歌集』一三四二の和泉式部の、

暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

という古歌をかすめているのではないか。郷里の父母との確執、山田美妙との結婚生活の破綻によって、稲舟の心は「人間関係の闇」にくれてしまった。それを救済し、晴るかす光を、稲舟は「月」に求めているのである。「物おもはする」の部分は、『全集』の註が指摘するように、西行法師の、

嘆けとて月やは物をおもはするかこち顔なるわが涙かな

を踏まえていよう。この歌は、稲舟が特に愛したものだたと推測される。

さて、この長詩で注目されるのは、「稲舟」という自らのペンネームを巧みに織り込んで、人生観照を試みた箇所である。

私はゆかしき こひごろも、 けふぬぎすて、 すてられて、 よるべ
浪間に こがれ行、 人をも世をも いなぶねの、 いなにはあらぬ 最上
川、 浮きつしづみつ 流れきし、 不盡のうらみ ほねにしむ、

「最上川上ればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」という古今歌によって、ペンネームを付けた自分。最上川の流域にある鶴岡から始まった自分の人生の破滅を、彼女は纏綿と歌おうとする。「稲舟」が「よるべ無く、浪間に」漂うのは、『源氏物語』浮舟巻で、宇治川を渡る浮舟が、

橘の小島は色を変はらじをこの浮舟ぞゆくへ知られぬ

と詠んだ箇所と、響きあうのではないか。『源氏物語』の河内本や、室町時代の謡曲『浮舟』では、最終句が「よるべ知られぬ」という本文になっている。「よ

るべくさすらう舟」それが浮舟という女の一生だった。「よるべ浪間に、こがれ行」「浮きつしづみつ流れき」の部分に、「稲舟」浮舟の見立ては、顕著である。さらに、この長詩の後方には、「うかびかねたる いなぶねの」ともある。美妙の自分に対する愛情が洩れたので、彼を信頼し、彼の愛情を「水」として浮かんできた自分という舟も、もはや浮かんで流れる（世を渡る）ことが不可能になった、というのである。

稲舟は、美妙との愛に挫折した自分の人生を、三角関係で破滅した『源氏物語』の浮舟の人生と重ね合わせているのである。浮舟は、二人の男性との間で引き裂かれた。一方、稲舟と美妙との三角関係は、「二人の女が一人の男を争う」というものであり、美妙の愛を勝ち得たのは水商売の女の方だった。

また、自らを伝説で名高い「玉藻の前」になぞらえる箇所もある。

なす野をすぎて 思ひにき、 ありやなしやは しらねども、 むかしが
たりに いひつたふ、 玉藻の古事 しのみつ、 我もにたりし こしか
たの、 罪のかずかず ありそ海や、

野があつたり、海があつたり、いささか場当たりの展開だが、「稲舟」玉藻の前」という見立ては、しっかり押さえておこう。『全集』の註に、この指摘がないのは不審である。「那須野」の殺生石の伝説は、『奥の細道』にも触れられているし、近世の俗謡にもなっているが、九尾の狐が美女に化けて天下を滅ぼそうとして退治された、というストーリーである。稲舟は、美しい自分の側にも男をだまそうとする「玉藻の前」のような「罪」がなかったかどうか、謙虚に反省しているのである。

なお、「ありやなしやは」の部分は、『伊勢物語』第九段の、

名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

の引用である。稲舟は、「恋人の有無」ではなく、「自らの罪の有無」を「ありやなしや」と自問自答している。

稲舟の回想と観照は、まだまだつづく。

さはれ心の くるしみは、 いふにいはいれぬ 夕ぎりに、 そこともしら
ず ふみまよひ、 つまこひわびて 音をぞなく、 をじかのつの、 つか
のまも、 忘る、すべは なきものを、

「をじかのつの、 つかのまも」は、『万葉集』五〇二の柿本人麻呂の、

夏野行く小鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや

からの引用である。さらに、「夕ぎり」「ふみまよひ」「鹿」という素材の列挙は、『源氏物語』夕霧巻の世界の雰囲気こそはかたなく漂っているように思われる。

稲舟は、美妙との結婚直後に作並温泉で遊んだ楽しい思い出と、一人で郷里に戻った悲しさを、切々と綴る。その中に、かなりの距離を隔てて、

ふりつもる 雪ふみわけて もろともに、 いともたのしく あそびにし、
(中略)
なくなくも、 我のみひとり 立かへる、 なげきはつきぬ 悲みの、

という二つの文章が発見できる。ここは、『伊勢物語』八十三段で、在原業平が惟喬親王を訪ねる場面の引用である。すなわち、

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは
とてなむ、泣く泣く来にける。

という文章が踏まえられているのである。幸福な昔の回顧と、孤独な現在の対比という発想を、稲舟は『伊勢物語』八十三段から学んだのである。

長詩の最後に、「つひにゆく、 死出の山路は かはらぬを」とあるのは、やはり『伊勢物語』百二十五段の、

つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを

稲舟の回想と観照は、まだまだつづく。

の引用である。

稲舟は、古典文学の読書によって知り得た『源氏物語』の「浮舟」に最も強く我が身を重ね合わせている。それは、彼女に「恋に破れた女」というセルフ・イメージがあるからである。また、自分が「罪ある女」としての「玉藻の前」ではなかったかと自問する、しおらしさもあった。そして、『伊勢物語』の名場面・名文句をちりばめつつ、短い一生の中の幸福と不幸のめまぐるしい交錯を回想している。

けれども、稲舟は「古典の表現」や「古典の発想」から一步も出ていない。ここに、おそらく稲舟の限界があったのだろう。

12 小説『小町湯』

明治二十九年六月の『文芸倶楽部』に発表された。富豪の二人息子が、兄は哲学を目指すものにならず、弟は画家として成功するという話。弟が、裸体画の勉強をするために銭湯の番台に立ち、必死に絵の構図を考えるという場面の滑稽さが、この小説の主眼である。

尾崎紅葉には、『裸美人』（明治二十二年）、『むき王子』（明治二十四年）などのように、女性の裸体を描く絵画を題材にした作品がある。これは、裸体画を挿絵にしてセンセーションを巻き起こした山田美妙『胡蝶』（明治二十二年）への対抗心があったからだとされる。

この小説では、古典文学の摂取はさほど目立たない。しいて言えば、二人の息子に高等教育を受けさせたのに、どちらも自分の跡を継いで商人になつてくれない父親の嘆きを、「子故の闇」と述べている場面（藤原兼輔「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」の引用）くらいだろうか。

もう一箇所、弟が銭湯で見かけた千載一遇のチャンスで、「うどんげの花」に喩えている場面。『全集』の註は、『法華経』の本文を引いている。確かにその通りなのだが、「うどんげの花」という言葉が稲舟のボキャブラリーに加えられたのは、『源氏物語』若紫巻の、

優曇華の花待ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね

という和歌の知識によるものではなからうか。番台に立っている男の目には、ほとんど絵になるはずもない醜悪な裸体の女性たちが映る。その中に、絵になり得る唯一の裸体があったのだ。「優曇華の花」美しいモデル、「深山桜」その他大勢の入浴者」という見立てである。

13 浄瑠璃『残怨日高夜嵐』

明治二十九年八月の『智徳会雑誌』に発表された。紀州に隠れ住む滅亡した平家の公達・平教経の忘れ形見の花貝（瀧浪姫の世を忍ぶ姿）が、素性を突き止められて短い一生を了えるというストーリー。健気な乳母あり、美僧に成長した兄との邂逅あり、横柄な求婚者あり、裏切り者ありで、なかなか凝った人間関係が張り巡らされている。稲舟の最後の浄瑠璃作品にふさわしい佳作である。

姫の乳母が、平家の全盛時代を忍びつつ手仕事をしている場面に、

昔を今にくりかへす賤が手わざの糸車

とあるのは、『伊勢物語』三十二段の、

いにしへのしづのをだまき繰り返し昔を今になすよしもがな

の引用である。この歌は後世、初句を「しづやしづ」と変えて、静御前が源義経を偲ぶ和歌に作り替えられた。「平家哀史」あるいは「女人哀史」である『残怨日高夜嵐』に、この「しづのをだまき」の古歌が摂取されたのは、必然的なものだったろう。

平家が源氏に追われて西海をさすらった過去の回想では、「須磨や明石の浦千鳥」という部分に、『源氏物語』須磨・明石の巻の面影取りがある。

また、亡き一門を弔うために僧になった兄が、花を墓に手向けようとする場面に、

御仏にこの花なりともたてまつり父が冥福いのろうかと

とあるのは、西行法師の、

仏には桜の花をたてまつれ我が後の世を人とぶらはば

の引用であろう。

正体が露見した花貝は、追詰められて短い一生を了える。この場面に、

日高河原の夜風にちりてはかなき花貝が空しきからやうつせ貝

と、彼女の最期が語られている。「空しきから」は「うつせ貝」と同じで、中身がない貝殻だけの貝のことで、魂の失せた死骸の比喩。「から」と「うつせ貝」は、『源氏物語』蜻蛉巻で、浮舟を失った薫の心境が、

からをだに尋ねず、あさましくてもやみぬるかな、いかなるさまにて、いづれの底のうつせにまじりにけむなど、やる方なく思す。

と吐露される場面の「から」と「うつせ」でも用いられていた。

「稲舟Ⅱ浮舟」という見立ては、自らの不幸な人生を納得し受け入れるために、稲舟が必死にすぎた強迫観念である。あるいは、『更級日記』の作者がそうだった如く、「浮舟のように、はかなく生を了えたい」という不幸な人生への憧れがあったのかもしれない。

稲舟の心には、西行に憧れるような隠遁願望と、浮舟に憧れるような破滅願望とが入り交じっていたのかもしれない。

14 小説『五大堂』

明治二十九年十一月の『文芸倶楽部』に発表された。実は、この年の九月十日に、稲舟は短い一生を了えていた。数え年で二十三歳。満年齢では、わずかに二十一歳と十箇月だった。急性肺炎だったが、自殺説が取り沙汰された。

『五大堂』は、まさしく稲舟の「遺稿」である。分量的には、中編と言えよう。稲舟にしては、かなり長い方である。

ヒロインの名は、青柳糸子。偶然にも、稲舟のライバルだった樋口一葉の小説『たま櫂』（明治二十五年）のヒロインの名前「青柳糸子」と一致している。『古今和歌集』二六番、紀貫之の名歌、

青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花のはころびにける

に因んでいる。一葉も、稲舟も、古典的な教養を武器として、近代小説家たらしめた明治の女だった。ネーミングにも、その文学手法は、顕著である。

糸子は、希代の女たらしとも知らずに、兄・房雄の友人の文学者・今宮丁（よしみち）を慕っている。丁は、糸子の父・青柳子爵の愛妾・露の情夫である。

丁が庭を散歩していて、糸子からの恋文を受け取る。中身はないのに、見かけだけはよい丁の様子は、

築山のうしろ泉水のまはりなど、そゞろありきしつつ、流石やさしき文人として、折にあひたる古歌などひく、口ずさみ、……

と叙述されている。「折にあひたる」という語句は、『源氏物語』にしばしば用いられている。この場面全体の雰囲気は、作者（語り手）によって、「艶にやかしき夕なり」と総括されているが、これも『源氏物語』によくある雰囲気である。「丁」にせ光源氏」という見立てなのだろう。

糸子は、丁を恋慕して病に伏す。以前に『峰の残月』に関連して言及したが、『伊勢物語』四十五段の「恋を親に打ち明けられずに恋死にする箱入り娘」という文学趣向の引用である。糸子の病状が、「どこつて……どこが苦しいかわかりませんが、但何となく気がふさいでいけませんもの」と説明されているのは、『源氏物語』や『浜松中納言物語』などで何度か登場する「おどろおどろしくはあらぬ病」の口語訳なのだろう。こういう病が、最も危険なのである。

やがて、丁と露の情事が露頭する。危険人物として青柳家から追放された丁は、これまた追放された露と所帯を持つが、すぐに飽きて彼女を追い出す。そして、

糸子に家から大金を持ち出させて、二人で松島へと恋の逃避行と洒落込む。丁に深い考えも、糸子への真実の愛情もあるわけではなく、ただその日だけでも楽しく遊び暮らしたいという享樂的気持ちがあるばかりである。

ここは、『伊勢物語』で業平が宮中から二条の后を連れ出して「武蔵野」に逃げ込んだという場面とも違っているし、『源氏物語』の柏木が光源氏の正妻・女三の宮を誘拐して、地の果てまでも逃げたいと思った場面とも、違っている。愚かな男に、女がだまされて破滅するという、ただそれだけの人間関係である。

松島で、二人が会話する場面がある。漕ぎめぐる漁夫の船を見ながら、「随分つらい事が多いんですもの」などと語り合っているが、これは、

世の中は常にもがもな渚漕ぐあまの小舟の綱手かなしも

という『百人一首』の源実朝の和歌の内容を、散文小説の会話に仕立てたものである。

丁と糸子の楽しい夢は、あつけない幕切れとなる。二人の悪事を新聞で報じられた丁は、人生が八方塞がりとなって、死を覚悟するにいたる。この突然の回心は、何によってもたらされたのか。

『全集』の解題は、「自らの内で変革を遂げてゆく男性」を初めて造型した点に、小説作家としての田沢稲舟の成長と到達点を見出そうとする。けれども、この回心は、やはり稲舟が「創作のヒント」としていた古典文学の中に重要なヒントがありそうである。

『源氏物語』宇治十帖の最後のヒロインである浮舟が、稲舟本人のセルフ・イメージであったことは、既に何度も述べてきた。浮舟は、「浮世にはあらぬところ」を求めて、宇治川への入水自殺を図る。彼女は、薫と匂宮という二人の男性との間で板挟みとなって、身動きが取れなくなる。

『五大堂』の丁は、「いッそ浮世をよそに見て、静けきさとにねぶりなば、いかに心も安かならん」と決意して、海岸での入水自殺を図る。

糸子が眠った後で、ものに取り憑かれたかのように、よろよろと死地へと向かった丁がはっと我に返った心境は、

松吹風の肌さむきに、ふと心づきてあたりを見れば、岩根を洗ふさゞなみの音は女の泣如く、……

と叙述されている。ここは、『源氏物語』手習巻で、意識の蘇った浮舟が入水直前の自分の状況を、

皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風ははげしう、川波も荒う聞こえしを、

とある箇所と、酷似する。『源氏物語』の読書の記憶が、稲舟の脳裏に作用した結果であろう。つまり、これまで稲舟は、「自分（不幸な女性）⇔浮舟」という見立てによって、いくつかの小説を創作してきた。遺稿『五大堂』では、「丁（不幸な男）⇔浮舟」という性を超越した見立てによって、彼の自殺願望と死の誘引とを描き切っている。

『五大堂』のこの場面の構想の源泉は、『源氏物語』である。『源氏物語』からそれほど外へは出ていない。しかしながら、『源氏物語』のストーリーを大きく組み替えるという大冒険を敢行している。

我に返った丁は、一瞬、当初の思い通りに入水するか中止するか、迷ったことだろう。ところが、寝たはずの糸子が丁を追ってきた。そして、自分も一緒に死にたいと、丁に訴える。そして、二人の心中が実行された。

一方、『源氏物語』手習巻の浮舟の回想によれば、宇治川に入水しようと屋敷を抜け出したものの、浮舟は途中で我に返り、先へ進むか、後ろへ戻るか、決めかねる。そこに、匂宮とよく似た「いときよげなる男」が現れ、「いざ、たまへ、おのがもとへ」と誘う。この男（その正体は「物の怪」）に誘われて浮舟は出奔し、正気を失った。

『五大堂』の最後のクライマックスでは、「丁⇔浮舟」、「糸子⇔物の怪」という見立てなのである。作品の始まりの頃の可憐な糸子の姿はなく、男を死地へと誘引する物の怪のような、思い詰めた糸子の姿があるばかりである。

これは、作品構成上の分裂・矛盾と見るべきだろうか。それとも、執筆を通して、作者が人物造型を深めた結果であると評価すべきだろうか。

大野茂男『論攷田沢稲舟』は、次のように論断する。

この作品(『五大堂』)を一葉の晩年の作と較べると、一葉の代表作が、同じ文語体でも新鮮で、生活があるのに対して、これは文体も語彙も、登場人物のセリフと心理描写も、古風で典型的で遙に劣る。

この見解の半分は、納得できる。確かに、稲舟の作風と文体は、『源氏物語』などの古典文学の外へ出るものではない。言わば、『源氏物語』の呪縛力と戦う力が、稲舟には乏しかった。一葉とて、『晩年の一葉』のみが文学史に残ったのであって、『青柳糸子』の登場する『たま櫛』の段階で終わっていたならば、単なる古典的・類型的小説家として、次第に忘れられていったことだろう。一葉は、半井桃水との別離によって、一気に成熟した何かがあった。それは、『源氏物語』との訣別でもあった。

田沢稲舟には、山田美妙と離婚した後で、余生が残されていなかった。それが、彼女の不運である。けれども、『五大堂』では、浮舟の物語を「男女を逆転させて引用する」という大胆な戦略が、最後の最後になって採用された。そこに、彼女の精一杯の到達点があったのだろう。

15 小説『唯我独尊』

明治三十年一月の『文芸倶楽部』に発表された。この号は、『第二閨秀小説』と銘打たれた臨時増刊だった。前年に逝去した若松賤子・田沢稲舟・樋口一葉の三人の遺作を掲載したものである。

梅園伯爵の愛妻の紫子は、実は医師の柳田美言を恋慕している。柳田の形見のダイヤモンド製の襟止めを飲み込んで重体になった彼女は、愛する柳田の手で開腹手術を受ける。麻酔によって理性の支配を失った彼女の口は、柳田への切々たる愛情を告白する。それを立ち聞かした卑劣な男がいて、梅園伯爵は紫子を離縁する。けれども、彼女は愛する柳田と結ばれて、幸福な再スタートを切ったのだった。

「梅」に「柳」に「紫草」。その他の登場人物のネーミングも、草や花にゆかりがある。稲舟は最後の最後まで、古典的なネーミングから脱却できなかったと見える。

『唯我独尊』の冒頭は、『伊勢物語』の多大の影響を受けている。

ふるき草紙の物がたり、伊勢や尾張の海よりも、深き思にあこがれて、浮名を今に残したる、其まめ男にゆかりある、前はすみだの川浪に、浮ぶは何ぞ都鳥、嘴と足とは赤襟の、まだいわけなきこしもとまで、見やう見まねにこましくくれ、主におとらぬ花心、さそふ水まつ風情なり。されども伯はむさし野の、はてさへ知れぬ草の原、わけてもとめし紫の、ねも見ぬ一人の花嫁御の、無情をかこつ今日このごろ、……

関連する箇所は、次の通り。

『伊勢物語』第二段 かのみめ男

『伊勢物語』第七段 伊勢・尾張のあはひの海づら

『伊勢物語』第九段 それを隅田川と言ふ。

これなむ、都鳥。嘴と脚と赤き。

さらに、「さそふ水まつ」は、『古今和歌集』九三八・小野小町の、

わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ

を引用し、「むさし野のはてさへ知れぬ草の原」の部分は、『新古今和歌集』三七八・四三二の、

武蔵野やゆけども秋のはてぞなきいかなる風か末にふくらむ
行く末は空も一つの武蔵野に草の原よりいづる月影

などの一連の武蔵野の古歌を踏まえている。「紫の、ねも見ぬ」の部分は、『源氏物語』若紫巻の、

ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを

ものである。稲舟は、『伊勢物語』の語彙と文体で、ヨーロッパに留学した青年の人生を描こうとするのである。

なお、この雑記の文中には、「者」「もの」などと書かれている意味の取りにくい言葉がある。この「者」「もの」は、「金」のことで、王朝文学には「金銭」を意味する語彙はなかった（貨幣経済そのものがなかったから）。また、下賤な物を具体的に呼ばずに臍化して呼ぶのは「女房詞」の常だったので、稲舟の「もの」の使い方も納得できよう。

王朝の文体と考えれば、『全集』の誤読・誤刻がいくつか訂正できよう。

此男ことに文作ることに工みなりければ、小説家となんなれり。氣ふ父母はとくに失せて同胞もなかりけり。

『全集』は、「氣ふ」を「けふ」今日」と解釈しているが、いかにもこじつけめいて、苦しい。ここは、

此男ことに文作ることに工みなりければ、小説家となんなれりける。父母はとくに失せて同胞もなかりけり。

と読まねばならない。「氣」は「け」の変体仮名。「ふ」は「る」の誤読。

さらに、「男に対して」女の心からぬものなかりけり」という箇所も、「女の心をかけぬものなかりけり」でないと、意味が通じない。こちらは、稲舟の書き間違いかもしれない。

さて、ヨーロッパに留学した日本人の美男子は、当地で「となりにすめるやんごとなき人のむすめ」と「なにがしの大臣の五の君」の二人から愛される。けれども、日本に残した愛する女性を思う男は、外国の女性になびかない。一計を案じて、片一方に「男装して来てください」、もう一方には「そのまま来てくださ」と手紙を書いた。鉢合わせして二人は、男装した女を恋しい日本人と違って抱き着いたりして、とんだ茶番を演じる。

この滑稽なストーリーで、「大臣の五の君」とあるのが、稲舟の古典への教養の深さを示している。『浜松中納言物語』という物語がある。主人公の中納言は、

妊娠した恋人を日本に残して、遣唐使として唐に渡る。そして、さまざまな恋愛体験をするのだが、「一の後の御父の大臣、あまたが中に五にあたる娘」が、中納言の美貌を一目見て、恋に落ちたのである。

まず、田沢稲舟が『浜松中納言物語』を既に読んでいて、そのストーリーと人間関係を利用できるほどに咀嚼していることがわかる。

次に、『浜松中納言物語』の「大臣の五の君」は、中納言を恋慕して病に伏す。両親が心配して訪ねると、「そこはかとなく、おどろおどろとくるしきことは侍らねど」と述べて、「恋の病」であることを打ち明ける。稲舟は、いくつかの小説で「恋を両親に打ち明けられずに苦しむ令嬢」の姿を描いていた。それは、『伊勢物語』四十五段の影響だろうと考えられたのだが、この『雑記帳』を考慮すれば、『浜松中納言物語』の影響でもあることが判明する。

最後に、『雑記帳』で、男が「月はながめし形身ぞ」と口ずさむシーンは、『浜松中納言物語』で、中納言と大臣の五の君が別れる場面、

日の本の山より出でん月見てもまづぞこよひは恋しかるべき
かたみぞと暮るる夜ごとに眺めてもなぐさめやはなかなばなる月

という和歌を交換するあたりから発想された可能性がある。

『医学修業』で家出した光子が、月を眺めながら「ヨーロッパに留学中のお兄様は、今頃どんなお気持ちでこの月を眺めておられるのだろうか」と悲しむ場面があった。この場面設定は、初期の習作のノートである『雑記帳』の中に、しっかりと書き込まれていたのである。

17 おわりに

田沢稲舟は、樋口一葉のライバルだった。樋口一葉の文学修業は、『源氏物語』などの古典文学の語彙と人物操作と場面設定とを吸収し尽くした後で、それと袂を分かつ点に特色があった。

稲舟と一葉は、ほぼ同時に活躍し、ほぼ同時に夭折した。ところが、一葉には「短い晩年」があり、奇跡的な飛躍がもたらされ、『十三夜』『たけくらべ』『にこりえ』などの歴史に残る名作を量産し得た。むろん、これで樋口一葉は燃え尽き

この滑稽なストーリーで、「大臣の五の君」とあるのは、稲舟の『源氏物語』の深さを示している。『浜松中納言物語』という物語がある。主人公の中納言は、

りえ』などの歴史に残る名作を量産し得た。むしろ、この『源氏物語』

たのであり、彼女に「長い余生」があつたとしても、『たけくらべ』を上回る小説は書けなかつたのではないか。どんなにそこからの離脱を試みようとも、『源氏物語』の文体と語彙を用いて「近代小説」を作るのは限界があり、そのぎりぎりの地点まで樋口一葉は来て、力尽きた。

田沢稲舟は、その人生の最期に「奇跡の一年」がなかつた。そこが、文学史における評価の明暗を分けた。歴史に残る代表作を持たない稲舟は、「習作」ばかりを残した。けれども、ある段階までの稲舟は、確実に樋口一葉の好敵手ではあつたのである。明暗を分けたのは、例えば「古典と戦う意志」の強弱である。古典を愛し、古典に影響を受ける点において、一葉と稲舟はまさに匹敵していた。ただし、一葉には、「近代人の生活を、千年前の紫式部の言葉で書き綴るのはおかしい。今、もし紫式部が生きていたら、近代文学にふさわしい新しい文体と語彙を開発するだろう」と述べるだけの強さがあつた（拙著『文豪の古典力』参照）。このような気持ちだが、稲舟には希薄だつた。

にも拘わらず、男性の小説家ばかりが活躍した明治時代に、数少ない女性作家として認知されていた田沢稲舟の存在価値は、これからも決してなくなるまいだろう。

わたしは、本稿のようなアプローチでの近代文学の分析をこれからも積み重ねたい。田沢稲舟以外の明治時代の女性小説家（三宅花圃・木村曙・北田薄氷など）の作品を読み、その表現の古典性を確認しつつ、「新しい小説」の誕生に際して彼女たちがどのような役割を果たしたのかを、実証的に究明したいと考えている。わたしは田沢稲舟に興味を持って、初めて山形県鶴岡市を訪ねてから、本稿が完成するまでには、約四年の歳月を要した。その割には、稲舟という女性の心の深層に迫り得ていないという、もどかしさが残る。今後、他の女性作家の作品の分析を試みるだけではなく、この拙稿そのものも不断に増補・訂正してゆく所存である。

Archaic and Poetic Words in Tazawa I'nabune's Works

Keiji SHIMAUCHI

Abstract

Tazawa I'nabune was a pioneer of modern female literature. She was a wife of Yamada Bimyo and a rival of Higuchi Ichi'yo.

This paper indicates concretely the sources of distinguishing words in Tazawa I'nabune's works. In her works, Tazawa I'nabune employed lots of classical words found in those Japanese classical works.

1. *Genji Monogatari*
2. *Ise Monogatari*
3. *Kokin Waka Syu*
4. *Sagoromo Monogatari*
5. *Hamamatsu Chynagon Monogatari*

I'nabune's main background was a good knowledge of Japanese classical works. "Modern literature" of Meiji Era is decisively influenced by "Classical literature".

キーワード：田沢稲舟，山田美妙，樋口一葉，古典詞，引用，源氏物語，伊勢物語，古今和歌集，
狭衣物語，浜松中納言物語